

答辞

日差しが日々柔らかくなり、桜の蕾も色付き初め、命の躍動する春の訪れを感じる季節となりました。本日、私たちは、卒業の日を迎えます。

現在、世界では新型コロナウイルスにより、恐怖と不安に包まれています。このよう状況の中で卒業式を行うために、思案してくださった、高橋圭三学長先生をはじめ、諸先生方、職員の皆様方、並びに関係者の皆様方にご尽力いただきましたこと、卒業生一同心より感謝申し上げます。卒業式が中止となってしまったことは本当に残念ですが、いつの日か、この日のことを笑い話として話題にできる日がくることを心待ちにしています。

松山東雲女子大学に入学してからの四年間は瞬く間に過ぎていきました。真新しいスーツに身を包み、大学生活への希望と将来への不安を胸に桑原キャンパスの正門をくぐったあの日のことが、つい昨日のことのように思い出されます。

大学一年目。慣れない九十分の講義に、眠い目をこすり

ながら挑んだこともありました。

大学二年目・三年目。専門的な講義も増え、精神的にも余裕がでてきました。勉学に励む者や、アルバイトやサークルに打ち込む者、友人たちと全力で遊ぶ者、何にも追われることのない穏やかな日々でした。このとき、大学四年目にして大きな壁にぶつかることなど考えてもいませんでした。

大学四年目。いよいよめでたき卒業を迎える年となり、卒業まで平和な日々を過ごせると思っていた私たちに、学 생활最大の試練が二つ待ち受けていました。

まず、進学をするのか就職をするのかそれぞれが大きな岐路に立たされ、私は就職という選択肢を選び、春からの就職活動に勤しみました。なかなか自分の希望する道に進めず、何度もあきらめようと思いましたが。何度も壁にぶつかり、何度も心が折れました。そのような困難を乗り越えられたのは、先生方や職員の方からのアドバイス、そして、友人たちの支えがあったからこそだと思います。

就職活動が終わればすぐに卒業論文という大きな壁が立ちました。書いても書いても終わらず、パソコン

と向き合う日々が続きました。後輩に伝えたいのは、卒業論文は早めに取り掛かったほうが自分のためだよ、ということですよ。

この四年間を振り返ってみると、何気なく過ごしていた日々が今では愛おしく思えます。正直、卒業の実感はまだ湧いていません。入学した当初に思い描いていたなりたいた自分になれたのか、少しでも成長できたのか、自問自答を繰り返す日々です。しかし、松山東雲女子大学で学び、友人たちと過ごした有意義な時間は、社会に出ても、人々にも手を取り合い、活躍できる女性へと成長できたかけがえのない大切な時間です。

私たちは、四月からそれぞれの道へと進んでいきます。四年前、入学したときと同じように希望と不安で満ち溢れています。不安で今すぐにでも泣いてしまいましたが、前に進んでいかなければなりません。松山東雲女子大学の学生であったことを誇りに思い、社会に出たとき、常に学ぶ姿勢を忘れず、行動し、相手を思いやる気持ちを忘れないで頑張っていきたいと思います。

最後になりましたが、諸先生方、職員の皆様方が日ごろ

から私たちを温かく見守り、時には厳しく、時には優しく助け、支えてくださったこと心より感謝申し上げます。また、どのような時も笑って「おかえり」と出迎えてくれた両親、本当にありがとうございます。「大丈夫」という言葉に何度助けられたのかわかりません。これからもよろしくお願いいたします。そして、四年間という最後のかけがえのない学生生活のなかで出会ってくれた友人たちへ。四年間ありがとうございます。四月から離れ離れになりますが、いつの日か、またみんなで笑って再会できることを楽しみにしています。それまでお元気で。

これまで私たちを支え、導いてくださったすべての方に、卒業生を代表して心より御礼申し上げます。そして、皆様のご健勝と松山東雲女子大学の更なる発展をお祈りし、答辞とさせていただきます。

二〇二〇年 三月十三日

松山東雲女子大学 卒業生代表